



健康の輪



編集●全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局(結核予防会内) 題字●初代会長 廣瀬勝代

第73回結核予防全国大会開催 秋篠宮皇嗣妃殿下おことば



本日、「第73回結核予防全国大会」が、「結核対策の今 — 新たなステージへ」をテーマに開催されております。

本大会は熊本県で開催する予定でしたが、感染状況をふまえ、本部のある東京からのオンライン開催となりました。

大会式典では、「第25回秩父宮妃記念結核予防功労賞」の表彰式がおこなわれます。長年にわたり結核対策に貢献してこられ表彰を受けられる皆さまに、心からお祝いを申し上げます。

結核対策は、今も大変重要な課題です。2020年の統計によりますと、日本では約12,000人が新たに結核を発症し、約1,900人が命を落としました。新規登録患者には高齢者が多く、20歳代では新規登録患者の7割以上が外国生まれです。また、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行による結核対策の遅れは、世界中で問題になっています。今後とも、国内の結核患者の早期発見や治療に力を入れるとともに、罹患率が高い国や地域に対して日本の経験を活かした協力をおこなうことが求められております。

本日は、午前中に全国支部長会議、午後には研鑽集會が開催されました。全国支部長会議では、「10年後の健診を展望する」というテーマで、これからの健診のあり方について、専門的な議論がおこなわれました。また、研鑽集會では、「低まん延 新たな目標に向かって～2025年罹患率7を目指して」というテーマで、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響、保健所の対策、国際協力、婦人会活動などのお話がありました。感染症拡大により難しい対応が求められる中、医療や保健に携わる人々の強い使命感と努力を、大変心強く思います。

結核予防に関わる皆さまが、これからもご自身の健康に留意されながらご活躍されるとともに、困難な状況が収束し、また皆さまとお会いできる日が早く訪れることを願い、式典に寄せる言葉といたします。

第73回結核予防全国大会決議

新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」という。）の結核への影響が世界的な課題となっている。世界保健機関(WHO)は世界の結核患者届出数が2021年に18%減少し結核死亡者も増加させたことにより、コロナの世界的流行が結核終息に向けた長年の取り組みを逆戻りさせたと警告した。また、低栄養やHIV感染、糖尿病等の進行により、患者の増加や予後の悪化も懸念される。これまで目指してきた結核の終息に向けた患者中心の予防とケア、研究及び技術革新並びに多分野の連携協力に基づく対策は一層推進する必要がある。

我が国における2020年の結核罹患率は人口10万対10.1であり、例年以上の減少を示した。これは①コロナの感染を恐れて結核有症状者が受診を控えたこと、②健診事業の一時中止に加えオンライン授業やテレワーク等による健診受診者の減少、③コロナ対応を優先せざるを得なかったための接触者健診の停滞等、コロナのまん延により患者発見の機会が減少したことが大きく影響したためと考えられる。今後更に患者発生動向を慎重に観察しながら、患者減少の原因

を解明する必要がある。

外国出生者の早期発見のためには、入国前及び入国後のスクリーニングの実施、有症状者の発見対策や治療完遂のための患者支援等対策の充実を図るとともに、呼吸器症状が出にくい高齢者結核の対応として80歳以上の健診受診の促進や地域包括ケアシステムと連携した患者発見と支援を進める必要がある。

外務省、厚生労働省、国際協力機構（JICA）、結核予防会及びストップ結核パートナーシップ日本の5者は、昨年8月、ストップ結核ジャパンアクションプランの改訂版を策定し、2025年までに罹患率を人口10万対7とする新たな目標を設定した。今後、厚生科学審議会を始め結核に関わる様々な分野において、新たな目標に対する具体的な戦略について協議を進める必要がある。

以上から、本大会は、国及び地方公共団体、医療機関及び結核予防会、全国結核予防婦人団体連絡協議会等の関係団体が力を合わせ、次の4項目について努力することを決議する。

一、新型コロナウイルス感染症が結核対策に及ぼした影響を分析し、超高齢者・外国出生者などのハイリスクグループに対する早期発見や確実な治療完遂を図るための対策を着実に進めること。

一、新型コロナウイルス感染症まん延の経験を踏まえて、保健所や医療機関等において、必要な結核対策の実施及び医療の適切な提供が行われるように、公衆衛生及び医療体制の強化を図ること。

一、日本の結核対策の経験や革新的な技術開発を通して一層の国際協力を推進し、世界の結核の終息に向けた対策の充実に努めること。

一、市民社会の役割の重要性を踏まえ、全国結核予防婦人団体連絡協議会は、国内外の関係団体と連携して政策決定者へ働きかけるとともに、感染症の予防と感染症に対する偏見をなくすために、市民に対する正しい知識の普及・啓発を推進し、複十字シール運動を更に活性化すること。

令和4年3月8日
第73回結核予防全国大会

第73回結核予防全国大会宣言

新型コロナウイルス感染症まん延の経験を踏まえ、結核を含めた感染症対策の重要性を全ての国民と世界の人々が共有し、新たな結核対策の課題に立ち向かうとともに、感染症に対する偏見や差別をなくすための活動を推進する。

国連の持続可能な発展目標及び世界保健機関が進める結核終息戦略の目標達成のために、日本が高まん延期を克服した経験と日本で開発された革新的技術を活かし、感染症対策に関わる国内外の関係機関と連携しながら、結核対策活

動を推進する。

以上、宣言する。

令和4年3月8日
第73回結核予防全国大会

3月24日 世界結核デー 結核予防会総裁おことば



3月24日の世界結核デーにあたり、国際結核・肺疾患予防連合の名誉会員であられる、結核予防会総裁秋篠宮皇嗣妃殿下より、おことばを賜りました。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行のなかで、この2年間にわたり結核対策に全力で取り組んでこられたすべての皆さまに、心から感謝の気持ちをお伝えいたします。

そして、この感染症のまん延などの困難な状況により、医療サービスが中断され、診断や適切な治療を受けられずにいる人を含め、結核に苦しむ人々とご家族の皆さまに、思いを寄せております。

結核への意識を高め、予防や治療を行う私たちの努力が実を結び、人々の命が守られることを心から願っております。

より健康的で持続可能な世界の実現を目指すため、結核根絶に向けて皆さまと力を合わせてまいりたいと思います。

※結核予防会ホームページにも掲載されています。(https://www.jatahq.org/news/2715)

MESSAGE FROM HER IMPERIAL HIGHNESS CROWN PRINCESS AKISHINO HONORARY MEMBER OF THE UNION

24 March 2022
WORLD TB DAY 2022

This World TB Day, H.I.H. Crown Princess Akishino of Japan, an Honorary Member of The Union and Patroness of the Japan Anti-Tuberculosis Association, and a committed global TB advocate, issued the following message:

“I would like to express my sincere gratitude to everyone around the world who has been working so hard to fight against tuberculosis during the COVID-19 pandemic for over two years.

My heart is with all those suffering from tuberculosis and their families, some of whom are left undiagnosed or not properly treated because of the disruption to health services caused by this pandemic and other difficulties.

I sincerely hope that our efforts to strengthen measures for raising awareness of tuberculosis, and its prevention and care, will come to fruition and save many precious lives.

Let us work together to achieve our shared goal of eliminating TB, as an important part of building a healthier and more sustainable world.”

(原文) <https://theunion.org/news/her-imperial-highness-crown-princess-akishino-of-japan-WTBD2022>

清瀬を訪ねて

結核予防会総裁 秋篠宮紀子

東京都清瀬市では、1931（昭和6）年に東京府立清瀬病院が設立されてから、一番多かった1950年代中頃には、15の病院・療養所で5000人以上の結核患者が療養していました¹⁾。

その後、結核が薬剤で治療できるようになって患者が減少したため、療養所の多くは一般病院に転じましたが、現在でも、東京都の結核病床をもつ13の病院のうち、3つが清瀬市にあります。結核予防会の複十字病院はその1つです。隣接する結核研究所では、結核に関する基礎的な研究をおこない、医師や保健師、看護師、放射線技師の研修を実施しています。



療養所で発行された俳句と和歌の同人誌

は、療養所の患者による俳句や和歌の同人誌がありました。強力な薬による化学療法が進歩する前は、入院が年単位の長期にわたり、安静に過ごすことが求められる中で、患者が俳句や和歌を作り論評し合い、療養所内でガリ版の同人誌を作っていました。他の療養所の文芸サークルと同人誌を交換することもあったそうです。郷土博物館では、当時の患者の生活や心境を伝える貴重な史料として、同人誌を収集していると伺いました。

著名な文学者も清瀬で療養生活を送りました。今回の展示では、サナトリウムを舞台とする小説『草の花』でも知られる福永武彦と、俳人の石田波郷、のちに直木賞を受賞した結城昌治が、清瀬の同じ療養所の中で交流していたことなどが紹介されていました。

見学時に展示の解説をしていただいた市史編さん室の職員のお話では、展示されている療養所のパンフレットや俳句・短歌の同人誌の中には、かつて清瀬で療養生活を送った方々から寄贈されたものもあるということでした。また、回復期の患者が病棟での療養が終わって、二人一組で作業療法をし

ながら生活した「外気舎」の模型は、学芸員が時間をかけて自作したそうです。様々な資料を収集し、結核療養という現在では必ずしも身近ではないテーマを分かりやすく展示するために工夫を重ねている熱意に感銘を受けました。



「外気舎」の模型

清瀬市立郷土博物館を訪ねて

今年の4月、清瀬市立郷土博物館のテーマ展示（特別展）「結核療養と清瀬」を見学しました。清瀬市の市史編さん事業の過程で収集された結核関連の資料を展示する企画です。結核研究所も協力しています。

結核の歴史に関する展示では、結核研究所が所蔵する貴重な書籍を見ることができました。江戸末期の『内科新説』は、英国人の医師ベンジャミン・ボブソンが西洋医学を中国語で記し、上海で出版した医学書を、三宅良齋^{さんざい}という人が返り点を付け読みやすくして日本で刊行した本です。結核は「労病」という名称で紹介されています。また、結核菌の発見についてのコッホの論文“Die Aetiologie der Tuberculose”が収められた書籍も展示されていました。どちらも初めて見る史料でした。

清瀬とゆかりのある史料の中に

清瀬の「うちおり」

テーマ展示と併せて見学した郷土博物館の常設展では、「清瀬のうちおり」を見ることができました。これは、明治から昭和にかけての時代に清瀬市や周辺地域の農家の女性たちが家族や自分のために織った布で仕立てた着物や裂、そして原料の糸などを、市民団体が中心となって収集、整理した資

料で、国の重要有形民俗文化財にも指定されています。

明治以降、呉服屋で反物を買って家族の衣類を作ることが一般的になってから、自宅で家族用に織った布を「うちおり」と呼ぶようになったそうです。清瀬市とその周辺は、江戸末期から「村山緋」と呼ばれる藍染めの木綿緋の生産や養蚕が盛んでした。商品にならなかった繭からとった絹糸や余った木綿糸など手持ちの材料を使い、農作業や家事の合間に女性が織った布地は、家族の着物や帯、野良着、布団がわなどに仕立てられました^{2), 3)}。

展示されていた長着や裂織りの帯は、丁寧に作られていて、着られることがなくなってからも家族の形見として大切に保管されていたことがわかりました。機織り機や糸車などの道具から、寸暇を惜しんで働いた人々の姿が見えるようでした。



「清瀬のうちおり」の展示

清瀬小児病院跡地記念像を訪ねて

清瀬市には、結核に罹った子どものための病院もありました。日本で最初の小児専門の結核施設であり、以前、この欄でもふれた、「都立清瀬小児結核療養所」です。

この施設は、子どもの結核患者

が減少してから、多くの診療科を備えた総合的な小児専門病院に発展し、「東京都立清瀬小児病院」と名称も変わりました⁴⁾。長い間、地域の子どもの医療を支えていましたが、2010（平成22）年に他の都立の小児専門病院と統合される形で閉院しました。小児病院を取り囲むようにあったアカマツの木々は、市民の要望もあり、移植して「アカマツ保全林」として残されています。

アカマツ保全林の一角に、「清瀬小児病院跡地記念像」があります。静かなたたずまいの母子像です。小児病院の記念誌には、1950年代初めの病院の環境を「周囲は松林にかこまれた静かな、そして夜になるとむしろ不気味にさえ思われるような状況だった」と回顧する医師の文章がありました⁵⁾。現在は、保全林の周囲に住宅が建ち並び、明るい雰囲気です。私が母子像を訪れたときには、近隣の方々や記念像の清掃のボランティア活動をしていた方々がお迎えくださいました。母子像と一緒に大きなアカマツの木々を見上げ、枝を揺らす風の音を聞きながら、当時入院していた子どもたちや、病院に子どもを預けて回復を待っていた家族が、どんな気持ちでアカマツを見ていたのか、しばし思いを巡らせました。

おすびに

今回、清瀬郷土博物館と清瀬小児病院跡地記念像を訪ねて、過去に結核の患者が過ごした厳しい療養生活について、改めて考えることができました。現在では、結核は薬で治せる病気となり、入院が必要な場合も期間は短くなりましたが、患者が時に感じる孤独や辛さを軽減することができているのだろうかとも考えました。

清瀬で最後に訪ねた結核研究所では、隣接する複十字病院でCOVID-19の対応にあたっている



清瀬小児病院跡地の記念像

医師や看護師からお話を聞きました。デルタ株、オミクロン株と流行するウイルスが替わり、患者の数や病態が変化するのに対応して、治療の方法も変えてきたというお話から、感染症対策の難しさを感じました。病院の他の部署からの応援や、市民からの感謝の声に励まされているという看護師の言葉も印象的でした。

新たな感染症の対策に日々あたっている医師や看護師などの医療職、そして彼らを支えている職種の人々に、改めて感謝しております。

参考文献

- 1) 島尾忠男「清瀬と結核」、『複十字』348号（2013年1月）
- 2) 清瀬市郷土博物館（編）『うちおり一条に託した想い―』（清瀬市郷土博物館、2006年）
- 3) 清瀬市郷土博物館（編）『うちおり―清瀬市及び周辺地域の自家製織物―』（清瀬市郷土博物館、2021年改版）
- 4) 川村猛「東京都立清瀬小児病院」『病院』56巻12号、pp. 1138-1144（1997年12月）
- 5) 東京都立清瀬小児病院40周年記念誌編集委員会（編）『四十年のあゆみ』（東京都立清瀬小児病院、1989年）

3月1日開催 第26回結核予防関係婦人団体中央講習会視聴者報告(敬称略)

<青森県 川村優子>

テレビではいつもお目にかかっている尾身先生はじめ、高名な先生方の講演を間近に視聴することが出来、オンライン会議も思ったより分かりやすい感じがしました。現在、結核予防婦人会の構成員は、全国的にみて65歳~74歳となり高齢化が進んでいます。多様な経験を生かし、地域への積極的な関わり方で、結核予防の一助を担うことに繋がると痛感しました。今一度高齢者である自身の生き方を問い直す有意義な講演会だったと思いました。

<神奈川県 石川壽々子>

今年度の講習会はコロナ禍が収まらない中、オンラインによる4先生の講義を拝聴しました。結核菌撲滅のために長期に亘って戦ってきた予防会の歴史は、コロナウイルス感染症との戦いを彷彿とさせ、予防婦人会としての私たちの活動の意味を改めて深めさせていただくことができました。このような機会を設けていただきありがとうございます。

<神奈川県 紅野弘子>

コロナウイルスとの関連で、講演①の地域医療機能推進機構の尾身茂理事長の話は大変興味深く聞かせて頂きました。最近の若年層の感染者増加の対策にはやはりワクチン接種を広めることが有効とのことでした。結核研究所の森亨名誉所長が小児結核はBCGワクチンの発明と普及により急速に低下したとの話から、コロナウイルスも結核もワクチン普及が最も重要だと感じました。

<山梨県 吉田富士子・飯島たみ子>

本県からは、2名がオンラインで受講しました。尾身先生は、結核は、コロナ同様、人→人感染する怖い感染症であり、小野崎先生は、海外の取組を知り、森先生は、発病を促す要因に、高齢者の低栄養があることを学びました。また、松田先生は、結核予防婦人会の始まりは、長野県内の小学校の集団発生を機に地域の

母親達が、予防活動に励んだ歩みを知り、感銘を覚えました。今後の活動は、地域の人々に、結核に関する正しい健康情報を伝えることだと痛感しました。

<岐阜県 河野美佐子>

以前、東京での講習会は、一度受けましたが、オンラインの講習会で、コロナ禍のなか常にテレビでお顔を拝見している尾身先生が講演されるということで、ワクワクして待っておりました。講演内容がぎゅっと濃縮されていましたが、自宅でゆっくりと聴くことができ、婦人会の歴史等についても、改めて学ぶ機会となりました。今後もこのような学習方法を続けていただければ、若い方達の加入、参加率向上も期待できるのではないかと思います。

<静岡県 渡邊和子>

尾身会長のお話を聞き、日本の検査体制は世界の中でも低く、進んでおらず、加えて、予防注射の接種率が伸びていないことに驚きました。それ故、感染者が減ってきていても亡くなる人が減らないということを理解しました。今後は、行政や保健所中心でなく、医療中心で考え、市民が自らできることをしていく、例えば予防注射を受け、事前に備えることが大切だと感じました。

<静岡県 瀬上若子>

森先生のお話を聞き、結核の恐ろしさと結核予防婦人会の歴史を再認識しました。現在、結核予防婦人会は65歳以上の方が中心となりつつあり、自らの経験と知恵を活かして地域の結核対策等、住民の健康を共同して守る活動を補完する機能が期待されています。女性の力は重要です。結成当時のように協力し合い取り組んでいきたいと思いました。

<鳥取県>

結核は過去の病ではなく日本でも世界でも罹患している方が少なくないことを知りました。コロナ収束に向けてクラスター対策、ワクチンの

接種が実施されている中、感染症拡大防止と社会経済活動の両立ができ、一日でも早く普通の生活が送れるようにと願うばかりです。コロナ・結核の終息に向け頑張っておられる医療従事者の皆様へ感謝するとともに、私も毎年協力している複十字シール募金を続けたいと思います。

<広島県 市川幸子>

今回の全国結核予防関係婦人団体中央講習会では改めて、結核予防と女性会・婦人会活動との関わりについて知ることができた。結成以来長年にわたり活動を継続してきた団体は、成員が変わっても活動内容を次の人に引き継ぎ、歴史を紡いでいく。紡がれた歴史はその団体の財産として残る。しかし、その歴史を振り返る機会は多くはない。結核予防の初心に帰るという意味でも今回は有意義な研修会であったと思う。

<山口県 藤家幸子>

オンラインにより配信された中央講習会は、コロナ禍にあって特別興味ある内容で、貴重な研修となりました。また、尾身茂理事長さんの婦人会活動に期待することと、これまでの結核予防募金活動への感謝のおことばが、活動の更なる励みとなりました。

<愛媛県>

日本・世界の新型コロナウイルス感染症対策の状況を聴くことが出来ました。風邪、インフルエンザとは違うコロナウイルス感染症は、出口の見えない長い付き合いになる可能性があるとのこと。また、結核は日本が未だ蔓延国であるとの現状を受け止めました。私たちは自分たちが出来ることをしっかりと考え、適切な行動を行うことが必要です。啓発活動をやめてはいけなと、あらためて認識しました。



当日のプログラムは次号に掲載します。来年お会いしましょう

3月8日開催 第73回結核予防全国大会視聴報告

公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会
(福岡県結核予防婦人会)
会長 木下 幸子



今年こそは

令和4年3月8日(火)に開催された第73回結核予防全国大会が、無事終了したことについて、紙面上ではございますが、お祝い申し上げます。

令和3年3月の第72回結核予防全国大会(熊本開催)は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)感染拡大防止の観点から、令和2年11月の段階で東京でのオンライン開催に切り替わりましたが、令和3年8月に第73回も熊本再延期との報告を受けたときには、少し残念な気持ちでした。なぜかという、全国地域婦人団体連絡協議会(全地婦連)の総会は、11月に長崎で盛大に行われたからです。

ただ、11月からオミクロン株という新しい変異株の脅威も海外ニュースから知り、患者数が過去最多を更新というニュースが続くと残念な気持ちも少し落ち着いてきました。令和5年2月に予定されている第74回こそはと意気込んで、今から気分は熊本です。

研鑽集会の講演を拝聴して

基調講演では、ストップ結核パートナーシップ日本代表理事の森亨先生に新しい「ストップ結核ジャパンアクションプラン」についてご説明をいただきました。これまでの変遷、今なぜ「罹患率7」を目指すのかをわかりやすく解説していただきました。

婦人会活動の目標も1段階ギアを上げていかなければならないと感じました。



基調講演の森亨先生

続いて、シンポジウムでは、川崎市健康安全研究所所長の岡部信彦先生に、新型コロナウイルス感染症流行の現状とこれからのついて伺うことができました。決して風邪やインフルエンザのようではない、また2019年12月の武漢で最初に発生したときの得体のしれない感染症でもないことを学びました。

フェイクニュースやSNSなどで流れる膨大な情報に踊らされず、少しずつ新しい知見を積み重ねて、差別偏見をなくす活動が重要だと認識しました。

そして、大阪府茨木保健所所長の永井仁美先生から、国内結核対策の取り組むべき課題を示していただきました。

結核という感染症はコロナ禍でもしぶとく生き続け、少しも手を抜くことができなかつたというお話がありました。ただ、報告数が結核と桁が違うため、保健所の皆さんの身体的・精神的負担は、永井先生のお話を拝聴するだけで、切実に感じました。もし、保健所の方と話をする機会があれば、慰

労の言葉を伝えたいと思います。

さらに、国際協力について、結核予防会国際部付部長の小野崎郁史先生からご報告がありました。中央講習会で1週間前にお話いただいていたので、親近感が湧いていました。

きめの細かい国際協力活動のためにはシール募金を継続していかなければと実感しました。

最後に、婦人会事務局から各地の婦人会の活動報告があり、いろいろな葛藤の中、工夫をしながら懸命に活動をする仲間の活躍を我が事のようにうれしく思いました。



座長とシンポジストの皆さん

婦人会の皆さんへ

私は、去年は石川信克代表理事に、今年山下武子事務局長に祝辞を代読してもらいました。

来年こそは会場で、皆さまの前に立って、祝辞を述べたいと思います。

感染状況が今後どのようになるか、また新たな変異株が登場するのか先は見えません。しかし、直接お会いして、会えなかった時間に起きた、いろんなことをお話したいと思います。それまで皆さまお元気で、くれぐれも無理は禁物です。🐱

公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会 理事就任ご挨拶

山形県結核成人病予防婦人団体連絡協議会
会長 五十嵐 雪子



令和4年度全国結核予防婦人団体連絡協議会の理事就任に際し、責任の重さを感じております。

幹部研修会、全国大会等で学んだことを皆様と共に結核予防啓発活動に取り組んで参りたいと存じます。

新型コロナウイルス感染症が世界中に蔓延、拡大しており、結核患者の発見が遅れたり、治療の継続が難しいという問題も起きています。安全、安心して治療に専念できるよう願っています。更に、結核や感染症に対する偏見、差別を防ぐためにも、私達は、これまで培ってきた結核予防に対する正しい知識の普及啓発に取組み、活動を継続していくことが重要であると思います。

山婦協では、「家族の健康は主婦の手で」を合言葉に複十字シール運動、県知事の表敬訪問、生活習慣病予防等の事業を推進しております。結核は過去の病気ではないということを一人一人が再認識し、複十字シールの認知度、結核に対する意識が高められるよう努力して参ります。

結核予防婦人会長長野県連合会
会長 中條 智子



この度、関東地区より全国結核予防婦人団体連絡協議会の理事を拝命いたしました。理事就任ということで、責任の重さを痛

感しています。結核予防婦人会の発足を顧みますと、昭和25年7月、当時の結核予防会総裁であられた秩父宮妃殿下が長野県内の国立療養所を慰問された際に、長野市連合婦人会幹部らに、結核予防活動に尽力するよう励まされたことがきっかけとなり、長野市結核予防婦人会が結成されました。たまたまその年の9月に長野県御代田で、全国に衝撃を与えるような結核集団感染が発生し、地域から結核をなくそうと県内各地域で結核予防婦人会が組織され、昭和32年に全県組織としては日本初の結核予防婦人会長長野県連合会が誕生しました。現在日本は、「中まん延国」と位置づけられており残念なことです。更に結核への認識を高め、結核の予防と制圧に取り組んでまいります。

兵庫県結核予防婦人会
会長 友藤 富士子



この度、全国結核予防婦人団体連絡協議会理事に就任致しました友藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

理事就任という重責に身がひき締まる思いでございます。結核予防啓発活動に、心新たにとりくんでまいりたいと思います。

結核は昔の病気ではありません。日本の結核罹患率は年々低下しているもの、最新の統計である2020年でも12,739人の新しい患者が発生し、1,909人が命を落としている日本の重大な感染症です。

この様な状況を改善するため、感染症に関する啓発は一人ひとりの意識が大切だと思います。又、

健康的な生活が予防につながります。

結核を含む感染症予防や健診の受診勧奨などを継続してまいります。又、地域の方々や、行政の皆さんと、更に複十字シール運動の呼びかけを通して、結核を含む感染症予防啓発運動を進めて参りたいと思っています。

熊本県健康を守る婦人の会
会長 荒木 ミドリ



この度、九州地区より全国結核予防婦人団体連絡協議会の理事に就任することとなりました。

責任の重大さに身の引き締まる思いです。

熊本県でも新型コロナウイルス感染防止のため、例年行ってきました県知事表敬訪問や複十字シール街頭キャンペーンをはじめ各研修会等を中止せざるを得ない状況でした。そのような中でも、蒲島県知事からの「複十字シール運動募金へのお願い」や複十字シールを用いこの運動の理解とご協力を得るため地道に活動を展開しております。これからも日本からまた世界から「結核をなくそう」という思いを込めて、一人でも多くの人にご理解いただき、さらには発展途上国への支援を広げていきたいと思っています。

今年度の全国大会は熊本県で開催されます。全国の皆さまにお会いできる日を心より願っております。

ぜひ熊本へ 来てはいよ

成年年齢の引き下げ（18歳）について — 婦人会の皆さんに知っていただきたいこと —

東都大学沼津ヒューマンケア学部
公衆衛生学教授 松田 正己



2022年4月から、民法改正により、成年の年齢が20→18に引き下げられました。成年に達すると、親の同意を得なくても、自分の意思で様々な契約（携帯電話、部屋、クレジットカード、ローンなど）ができるようになりました。大学1年生は18歳であることが多く、何かトラブルがあった際に、親の同意を得ずに契約した場合、今までは民法で定められた未成年者取消権によってその契約を取り消すことができましたが、4月よりその対象から外れました。

現在、大学生などで懸念されているのは、以下のような10大トラブル¹⁾の増加です。

①副業・情報商材やマルチなどの“もうけ話”②エステや美容医療などの“美容関連”③健康食品や化粧品などの“定期購入”④誇大な広

告や知り合った相手からの勧誘など“SNSきっかけ”⑤出会い系サイトやマッチングアプリの“出会い系”⑥デート商法などの“異性・恋愛関連”⑦就活商法やオーディション商法などの“仕事関連”⑧賃貸住宅や電力の契約など“新生活関連”⑨消費者金融からの借り入れやクレジットカードなどの“借金・クレカ”⑩スマホやネット回線などの“通信契約”。

実際、私が以前に勤めていた大学は都心にあったためか、「脱毛エステ」に、数十万円も払う学生の話を目にしました。「美容関連トラブル」は増えており、そのためにアルバイトを増やす人もいます（生活困窮のためにアルバイトが必要な学生が多いことも、忘れてはならないことです）。また、何か商品を友人に紹介すると、「簡

単に稼げる」というマルチ商法も、ネットワークビジネス、投資セミナーという新たな形で学生をターゲットにしています。世間に慣れていない大学低学年の学生同士にラインなどで情報が次から次へと伝わり、私たちの知らないうちに広がっていく危険性があります。以下の標語を若い人がいる周囲のご家庭にお伝え下さい。

「軽い気持ちで契約しない、上手い話に飛びつかない、ネット情報に流されない、契約をせかす人は相手にしない、借金してまで契約しない」🐾

参考資料

- 1) 独立行政法人国民生活センター
https://www.kokusen.go.jp/news/data/n-20220228_1.html (2022年5月20日閲覧)

世界禁煙デーと禁煙ポスターのご紹介

5月31日は、WHOが定める「世界禁煙デー」です。今年のテーマは、“Tobacco: Threat to our environment (たばこ：環境への脅威)”でした。また、厚生労働省でも、5月31日から6月6日までを令和4年度「禁煙週間」とし、テーマは「たばこの健康影響を知ろう！～若者への健康影響について～」でした。

結核予防会では「禁煙ポスター」を作成し、お配りしております。ご希望の方は、下記にお問い合わせください。

<お問合せ先>

公益財団法人結核予防会事業部普及広報課

①お送り先の郵便番号・住所・氏名・電話番号と②必要部数をご記入の上、fukyu_hq@jata.or.jpにメールをお送りください。

なお、着払いで送料のご負担をお願いしております。

ご理解ご了承いただきますようお願い申し上げます。🐾



✚ 複十字シール運動が始まります

運動期間 8月1日～12月31日



昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症の収束が見込めない状況の中、公益財団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会の皆様には感染予防にご留意の上、複十字シール運動にご協力をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。

2020年に新たに結核と診断された患者数は12,739人で、2019年の14,460人から大幅に減少しています。しかし、コロナ禍による受診の控えや健診の中止などにより、結核の診断の遅れによる重症化も懸念されています。結核もコロナウイルスと同様に、重大な感染症です。結核についてより多くの方に知っていただき、徹底した予防と確実な治療の大切さについて、複十字シール運動を通して伝えていきたいと思えます。

今年も8月1日から複十字シール運動が始まります。皆様には各都道府県知事への表敬訪問、募金活動等、各自治体の状況に応じた感染予防を最優先してご協力いただきますようお願い申し上げます。

●令和4年度複十字シール ～当たり前の日常のしあわせ～

友達と一緒に遊んだり、学校に行ったりする日常は今まで当たり前のことでしたが、コロナ禍で人と会ったり出かけたりすることが制限され、私たちの生活環境は一変しました。そのような中で気が付いた「当たり前の日常がどんなに大切で、幸せだったのか」という思いをテーマに、イラストレーターのあさいとおるさんに描いていただきました。シールには人や動物たちが街で楽しそうに生活する様々な場面が美しい色合いで描かれています。

シールは大型シール（24枚綴り）と小型シール（6枚綴り）があります。複十字シール運動にお役立っていただければ幸いです。



大型シール（24枚綴り）



小型シール（6枚綴り）

シールぼうやと仲間たちの 新しいシールが出来上がりました！

ピンク色の背景にシールぼうやと仲間たちが勢ぞろいした可愛らしいシールになりました。

マスクにも貼っていただけます。
どうぞご活用ください。



✚ 公益財団法人結核予防会・募金推進課

ウクライナを想う

埼玉医科大学社会医学
教授 亀井美登里



はじめに

今年2月24日ロシアのウクライナ侵攻が始まった。唐突に始まったように見えた。しかし、それはウクライナの歴史を知らない人間の思い過ごしでしかなかった。

歴史

子どものとき、学校で「コサックの踊り」を習ったことを思い出す。独特のポーズでリズム感溢れた音楽にのせてテンポ良く踊るあのダンスである。この「コサック」こそ、ウクライナ人の祖先と知り、明るいイメージを思い浮かべた。だが、歴史はそのイメージとは裏腹に苦難の道をたどり続けてきた。

ウクライナはそもそもスラブ語で「辺境の地」という意味からきている。今のウクライナはわずか30年ほど前1991年に独立した国、しかも、この独立宣言は6回目だったと聞いて驚いた。これまでウクライナの人々は幾多の国々に蹂躪され、その下で暮らしを営みながらも、戦いの連続だったのだから。ウクライナ史の最大のテーマは、「国がなかったこと」だとウクライナ史の権威オレスト・スプテルニー（1941年～2016年、ウクライナ系カナダ人）は指摘している。

ではなぜそこまで、ロシアも含め周囲の国々がウクライナを手に入れたと思ったのか。それは皮肉にもウクライナが豊かな土地

だったからである。

世界の食料倉庫

土壌豊かなウクライナは大穀倉地帯でその昔「ヨーロッパのパン籠（かご）」と言われた。18世紀末から穀物の輸出のため黒海沿岸にオデッサ、ミコライイフ、ヘルソンなどの港町が建設され、急速に発達した。特に、新興の港町オデッサは、当時のロシア帝国にとって世界への南の窓であった。

その状況は現在もあまり変わらない。世界小麦輸出量は世界第3位でウクライナ・ロシア合計の総輸出量は30%を占める。今もアフリカや中東をはじめ世界でウクライナからの小麦を待ちわびている沢山の人がいる。農業だけでなく、鉄鉱石の産地であり、かつてソ連最大の工業地帯でもあった。

西欧世界とロシア、アジアを結ぶ通路であり、地政学的にも重要である。フランスの作家ジャック・ブノワ・メシャン（1901年～1983年）は6度目の独立の頃、ソ連（当時）にとってもヨーロッパにとっても「決定的に重要な地域ナンバー・ワン」と言っている。

戦うのはなぜか

コサックの国民性や生活について、ギョーム・ル・ヴァスール・ド・ボープラン（1600年頃～1673年、フランスの建築家でウクライナの地図と地誌を作った）はこう言っている。「彼らは非常に頑健

で、暑さ、寒さ、飢え、渇きに容易に耐える。戦いには疲れしらずで向こう見ず、自分の命を惜しまない。彼らは才気があり、器用である。また美しい体躯をもち、はつらつとしている。そして健康で、高齢者以外病気で死ぬ者は少ない。もっとも、大部分のものは『名譽の床』すなわち戦場で死ぬ。なんと悲劇的なことか。

人口減少の加速化

6度目の独立以来、実は人口が減少している。1991年独立時5146万人が2020年4373万人と700万人余り減少ときく。低い出生率と高い死亡率が影響しているようだ。飲酒、喫煙、肥満、高血圧などが主な死因なのだとか。平均寿命は71歳、特に男性は66歳。もしかすると今後さらに短くなるかもしれない…。

おわりに

ウクライナは数々の偉大なアスリートを輩出している。そのうちの一人「鳥人」として知られる棒高跳びレジェンドのセルゲイ・ブブカ（1963年～）はウクライナ・オリンピック委員会会長である。

今回の侵攻により、多くのアスリートも犠牲になっているという。ウクライナが独立を維持して安定することは、世界の安寧に直結する。1日も早い平和の到来を切に願う。🐱

ちふれ化粧品は・・・

「誰もが手に入れやすく、安心してつかえる化粧品を。」という思いを込めて創り出した私たちの化粧品です。



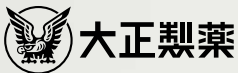
ちふれが、約束すること。

- **高品質・適正価格であること。**
製造や販売にかかる余分なコストを削減して、高品質を適正な価格でお届けします。
- **無香料・無着色であること。**
肌にやさしくありたい。だから、ちふれのスキンケアはすべて無香料・無着色です。
- **全成分・分量・配合目的を公開すること。**
品質の確かさや商品の安全性だけでなく、自分の肌に合った化粧品の内容を知っていただくためにも、すべての製品の全成分・分量とその配合目的を公開しています。
- **製造年月をすべての容器に表示すること。**
誰にもわかりやすく、安心して使えるように、製造記号を製造年月で表示しています。
- **環境問題に配慮すること。**
毎日使う化粧品だからこそ、環境を大切にしたい。ちふれは、詰替化粧品や植物由来容器の導入などで、環境問題に配慮しています。



ちふれ

あなたの、健康のそばに。



しあわせは、明日も健康であること。

人々の健康意識を高めること、日々の生活をOTC医薬品でサポートすること。
それが「セルフメディケーション」をスローガンに掲げる私たち大正製薬の使命。

OTC医薬品のリーディングカンパニーとして、

より優れた医療用医薬品の開発に力を入れるチャレンジャーとして、
常に「生活者の健康でより豊かな暮らし」の実現を目指しています。

大正製薬株式会社 〒170-8633 東京都豊島区高田3-24-1 インターネットホームページ <https://www.taisho.co.jp>
◎製品についてのお問い合わせは【お客様119番室】電話03-3985-1800 受付時間8:30~17:00(土・日・祝日を除く)